



vol.
190

と www.tenpla.net

プラネタリウム

筆者(平松)は、シニア向けから小学校までいろいろな場所に年間20~30回ほど講演に呼んでいただいています。話す内容は天文学一般から業務に直結したアルマ望遠鏡の紹介まで様々ですが、この1年間はブラックホールが多かったでしょうか。

講演後にはうれしいことにたくさんコメントをいただくのですが、特に子どもたちの反応にはハッとさせられるものが多くあります。たとえば、とある小学校での出張授業で、ベテルギウスがもう少しで超新星爆発を起こして一生を終えること、多くの天文学者はその瞬間を今か今かと待っているし私も楽しみにしていることを話した後の休み時間のこと。聞いていた子たちが回りに来てくれて楽しくおしゃべりをしていたら、「ベテルギウスのまわりにも生き物がいるかもしれないのに超新星爆発を楽しみにしてるなんて、天文学者は残酷だなあ。」と不意打ち

今月のお題
.....

ベテルギウスと知的生命と超新星

いろんなところで講演していると、子どもから思いもよらない視点からのコメントをもらうことがあります。視野、広げないと。

高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台)

を食らいました。そして、そんなこと考えたことすらなかった自分の視野の狭さを思い知りました。天文学的に言えば、ベテルギウスのような大質量星は強烈な光を出す上に寿命が短く、知的生命はおろか惑星さえも周囲に形成される可能性も低そうな場所です。とはいえ、そんな「地球の常識」が「宇宙の常識」でないことを示してきたのも天文学。ぐうの音も出ないとはまさにこのことです。そして、「夜空の星のまわりに惑星があって知的生命がいるかもしれない」というのが今の小学生には現実の話として捉えられているのだとしたらすごいことだな、という感慨も覚えました。まさに21世紀を担って生きる人たちです。

これほどの強烈なパンチでなくても、ハッとさせられることはたくさんあります。天文学的な内容以外にも、勇気をもらえた場面はいくつもありました。私の地元、岡山県倉敷市での講演では「僕は天文



アルマ望遠鏡で撮影したベテルギウス。
Credit: ALMA (ESO/NAOJ/NRAO) / E. O'Gorman/P. Kervella

学者になりたいので、それまで平松さんも頑張ってください」と心強い意志表明をしてくれた子がいました。山梨での講演では、聞いてくれていた4歳くらいの子が私の手を握って「よくがんばった〜」と言ってくれました。新しい気づきを与えてくれたり元気を与えてくれたり、講演会は話すほうにとっても得るものが大きい場なのです。